

# 曇鸞和讃考

## 延塚知道

はじめに

親鸞は、よく知られているように、二十九歳の時法然との値遇を得て、一人の念仏する仏者となった。法然を鶴嘴として、汲めども尽きない選択本願の源泉を掘り当てたのである。掘り当ててみれば、それこそが何人も安んじて生きることできる本来の世界であり、無数の名もない念仏者達が、そこで生き「無量寿仏の威神功德の不可思議なることを讃嘆」して本願念仏の伝統となり、それを親鸞にまで伝えたのであった。

その代表者ともいえる祖師達が七祖である。親鸞に先だって念仏者として生き、選択本願の念仏が真理であることを証した七人の祖師達。だから先輩であるその祖師達の言

葉に依って、親鸞は自らの信仰体験の自覚的意義を教えられる。近くは法然、善導に、さらには例えば曇鸞、天親から、念仏者としての目覚めが、『大無量寿経』に説かれる本願成就の信心であることをより深く透明に教えられ、それが聞く広大な浄土を教えられていくのである。

だから親鸞にとっては、念仏者としての限らない人生の讃歌は、そのまま念仏の伝統、特に七祖への讃歌と別のものではない。親鸞七十六歳の時の製作である『高僧和讃』を中心として、「正信偈」、『尊号真像銘文』等に、その讃嘆は見られる通りである。例えばその讃詠が百十七首にものぼる『高僧和讃』では、

龍樹（十首）、天親（十首）、曇鸞（三十四首）、道綽（七首）、善導（二十六首）、源信（十首）、源空（二十

## 首)

となつてゐる。特に、曇鸞、善導、源空の讃詠の数の多いことが目を引くのであるが、中でも、曇鸞は圧倒的にその数において他の祖師に勝つてゐる。その最も大きな理由は、なぜか曇鸞だけは、他の祖師に見られない伝記の讃詠が十一首にもものぼることに由る。親鸞が、曇鸞以外の他の祖師達の伝記について知らなかったとは到底考えられない。

例えば、龍樹の行実詳しい『付法藏因縁伝』等は、親鸞が目を通したであろう当時の大藏経にもすでに収録されていたはずである。それによつてもインドの祖師については、知ることができたであろう。さらには、道宣の『統高僧伝』や、親鸞が確かに読んでいたであろうと推察される戒珠の『浄土往生伝』等に依つて、中国の祖師達については当然知つていたはずである。まして、源信や師の源空について知らなかったはずはない。最も、師の源空の行実についての讃詠は、源空和讃に認められないわけではないが、伝記と言えるものではない。しかし、一人曇鸞については、道宣の『統高僧伝』、迦才の『浄土論』、道綽の『安楽集』によつて、十一首もの多くを費しながら、その伝記を讃詠されるのはなぜであろうか。

しかもその典拠となつてゐる道宣の『統高僧伝』や、迦

才の『浄土論』・「往生人相貌章」を詳細につき合わせてみると、曇鸞の行実の全てをトータルに讃詠してゐるわけではない。むしろ、親鸞の恣意的とも思われるような、取捨選択が行なわれている。このような親鸞の方法に思いを至せば、一般的な伝記の讃詠ともまた違つてゐると考えざるを得ない。

この論稿においては、曇鸞和讃の伝記の部分に依りながら以上二点、

一、親鸞が他の祖師を選んで曇鸞一人の伝記を讃詠するのはなぜか。

二、その行実の讃詠には、恣意的とも思われるほどの親鸞の取捨選択があるのはなぜか。

を、尋ねてみたい。そして、法然との境遇の宗教体験の意味を、曇鸞の行実に依り自覚化することができた、その親鸞の感動がそのまま、曇鸞の伝記への讃嘆となつてゐる。そのような親鸞の信仰の深化と自覚化を他にして、他の七祖への讃嘆もまたないということを尋ねることができればと、意図するものである。

## 一

曇鸞和讃三十四首のうち最初の十首が彼の伝記に関する

讚詠であり、最後の一首もまたそれである。最初の十首のうち、道綽の『安楽集』に典拠すると思われる三首を除いては、全て道宣の『続高僧伝』に依ると考えられるが、最後の一首だけは、迦才の『浄土論』『往生人相貌章』の文を典拠とするものである。それについては、また後で考えてみたい。

最初の一首目は、

一 本師曇鸞和尚は 菩提流支のおしえにて 仙経ながくやきすてて 浄土にふかく帰せしめき

まず、曇鸞の捨聖帰浄という美事な回心に関する讚詠であり、『続高僧伝』の次の文に依るものと思われる。

行きて洛下に至り、中国三蔵菩提留支に逢う。鸞往きて啓して曰く、「仏法の中、頗る長生不死の法にして、此の土の仙経に勝る者有りや」と。

留支、地に唾して曰く、「是れ何たる言ぞや。相ひ比するに非ざるなり。此の方向処にか長生の法有る。縦ひ長年を得て、少時死せざるも、終には更に三有を輪廻せんのみ」と。

即ち觀経を以て之を授けて曰く、「此れ大仙の方なり、之に依りて修行せば、当に生死を解脱するを得べし」と。

驚尋いで頂受し、齋らす所の仙方は並びに火もて之を焚く。

この曇鸞の行実は、宗教的回心の美事さを伝えるものとして、わが国の『今昔物語』巻第六、震旦付仏法篇、第四十三に、「震旦の曇鸞、焼仙経生浄土語」としても引用されるほど有名である。しかし、迦才の『浄土論』にはこの記事は認められない。唐の文論・少康による『往生西方浄土瑞応刪伝』、さらには王古の『新修往生伝』にも記されるものであるが、恐らく『続高僧伝』の先の文を踏襲したのもと思われる。したがって親鸞も『続高僧伝』の、この文に依ったものと考えられる。

『大集経』の註釈の途中で病に倒れた曇鸞は、その仕事を完成させるために長生不死の法を求めて、江南の陶隱居を尋ねる。彼に与えられた仙経十巻をたずさえた曇鸞は、帰路菩提流支に逢い、右のような問答の末、これまでの自力の迷情を教えられ、それを深く懺悔して、自力と共にその仙経を焼き捨てるのである。「雜行を棄てて、本願に帰す」とは、親鸞の回心の表明である。しかしこの表明に先だって生きた曇鸞は、そのような思想表現ではなく、何の説明もいらない具体的な生活の事実で、捨聖帰浄の潔癖さを美事に教えてくれたのである。そもそも仏道は、思

想に先だって、具体的な生活の事実がある。その事実を、曇鸞は美事な行実として、教えていたのである。親鸞は、自力の延長線上に想い絵がく仏道に選んで、徹底した自力無功の懺悔に開かれる願生浄土の仏道を教える教説として、曇鸞のこの回心の行実をまず第一に讃えるのである。

二 四論の講説さしおきて 本願他力をときたまい

具縛の凡衆をみちびきて 涅槃のかどにぞいらしめし

曇鸞が帰浄以前、四論の学匠であったことは、やはり『統高僧伝』の次の文によって、知ることができる。

内外の経籍は、具さに文理を陶しみ、而も四論仏性に於ては、弥々窮研する所なり。

迦才の『浄土論』の方には、

洞らかに衆経に曉らかにして、独り人外に出たり。

とだけ記されていて、四論の学匠であったことは言葉としては出ていないが、「恒に龍樹菩薩臨終開悟を請ふ」と書き出され、龍樹と曇鸞の深い因縁を強調していることから、中観の学匠であったことは、想像にかたくない。

しかし、この和讃では、「四論の講説さしおきて」と言うのであるから、やはり一般の教理や学問としての仏教に選んで、如来の本願に立つ願生の仏道への選択を明らかに

している行実として、回心を讃えた一題目と機を一にするものと思われる。同時に「具縛の凡衆をみちびきて 涅槃のかどにぞいらしめし」と讃えられるように、願生の仏道こそ、あらゆる人間の命の祈りともいえる如来の本願に立つ仏道である。そこに群萌と共にあった曇鸞を讃えているのである。

迦才の『浄土論』には、そのような曇鸞の様子がよく伝えられている。曇鸞の臨終にのぞんで、道俗共に三百人以上の人々が集まり、「大衆は声を齋しくして、弥陀仏を念じた」と伝えられている。親鸞はこのような大衆と共にあった曇鸞を想いながら「具縛の凡衆をみちびきて」と讃えたのであろう。

曇鸞の教学は、言うまでもなく『大経』を中心に展開している。同時に、「中国浄土教家のなかで、称名を前面に強く推し出したものは、曇鸞を以て始めとする」<sup>②</sup>、『観無量寿経』の価値を始めて強く意識されたのが曇鸞であり、その曇鸞がまた中国で始めて称名を提唱されたとすれば、『観無量寿経』と称名とのふかいつながりを思わねばならない<sup>③</sup>と先学によって指摘されているように、群萌と共にあった曇鸞を最も具体的に確保したものは、称名念仏であったと考えられる。その意味で、「大衆は声を齋しくして、

弥陀仏を念じた」という迦才の『浄土論』の記事は、曇鸞のもとに集まった念仏のサンガを考える上で、注目すべきである。ともあれこの二首目も、『統高僧伝』の先の引文に依っているものと思われる。

しかし次の三、四、五の三首の和讃はそうではない。

三 世俗の君子幸臨し 勅して浄土のゆえをとう 十方

方仏国浄土なり なによりてか西にある

四 鸞師こたえてのたまわく わが身は智慧あさくして

て いまだ地位にいらざれば 念力ひとしくおよ

ばれず

五 一切道俗もろともに 帰すべきところぞさらにな

き 安楽歎婦のころざし 鸞師ひとりさだめた

り

この三首の和讃の行実だけは、『統高僧伝』や迦才の『浄土論』にも見ることはできないし、その他の往生伝にも認められない。恐らく、道綽の『安楽集』の次の文に依るものである。

曇鸞法師の如きは康存の日、常に浄土を修す。亦毎

に世俗の君子有りて、来りて法師を呵して曰く。

十方仏国皆浄土なり、法師いづくんぞすなわち独り

意を西に注むるや、あに偏見の生に非ずやと也。

法師こたえて曰く。吾すでに凡夫にして智慧浅短なり。いまだ地位に入らざれば、念力均しくすべけんや。

草を置きて牛を引くに恒に心を槽檻に繋ぐべきがご

とし。あに縦放にして全く帰する所なきことを得んや

と。また難者紛紜たりといえども法師独り決せり。

親鸞は、曇鸞の伝記にはどうしても欠くことのできない大切な行実として、『統高僧伝』や迦才の『浄土論』にはないけれども、敢えて『安楽集』のこの部分だけを抜き出して讃じたものと思われる。言うまでもなく、曇鸞の徹底した機の自覚、即ち自力の深い懺悔である凡夫の自覚を表わす部分であり、それこそが群萌と共にある曇鸞を生み出した源泉である。

しかし、『安楽集』の全体の文章の流れから言えば、実はこの部分は、凡夫の自覚を強調しているというよりも、曇鸞の浄土往生の確かさを讃える所である。この文のすぐ後に曇鸞の臨終の奇瑞不思議を挙げるのであるが、それこそがこの部分の眼目であって、それによって凡夫の自覚を徹底した曇鸞が確かに浄土へ往生したことを述べるとともに、凡夫往生の異見を対破しようとしている文章である。要するに、曇鸞の臨終の奇瑞不思議を挙げて、凡夫往生の確かさを言おうとしている文章である。しかし親鸞は、そ

のような道緯の意図や『安楽集』の文章の流れを無視して、曇鸞の凡夫の自覚だけを抜き出してゐる。そこにだけ極端にスポットライトを当てて、曇鸞の伝記の重要な部分としているのである。その意義については、後に改めて考えてみることにする。

さて、次の五首、

六 魏の主勅して并州の 大巖寺にぞおわしける よ  
うやくおわりにのぞみては 汾州にうつりたまいに  
き

七 魏の天子はとうとみて 神鸞とこそ号せしか お  
わせしところのその名をば 鸞公巖とぞなづけた  
る

八 浄業さかりにすすめつつ 玄忠寺にぞおわしける  
魏の興和四年に 遙山寺にこそうつりしか

九 六十有七ときいたり 浄土の往生とげたまう そ  
のとき靈瑞不思議にて 一切道俗帰敬しき

十 君子ひとえにおもくして 勅宜くだしてたちまち  
に 汾州汾西秦陵の 勝地に靈廟たてたまう

この五首は、いずれも『統高僧伝』の次の文章に依つてゐるものと考えられる。

自行化他、流靡弘広なり。

魏主之を重んじて、号して神鸞と為す。勅を下して并州の大寺に住せしむ。晩に復た移りて汾州の北山石壁玄中寺に住す。時に介山の陰に往き、徒を聚め業をすすむ。今、鸞公巖と号するは是れなり。

魏の興和四年を以つて、疾に因つて平遙の山寺に卒す。春秋六十有七。(中略)

勅して乃ち汾西の秦陵の文谷に葬す。塋塔を宮建し、并びに為めに碑を立つ。今並び存す。

ここでは、曇鸞が天子の勅宣によつて大巖寺に行き、さらに玄中寺から平遙の山寺に移り、魏の興和四年に六十七歳で浄土往生を遂げたことが、讃えられている。天子は曇鸞を神鸞、あるいは鸞公巖と呼んでかぎりない尊敬を表わし、往生後も、曇鸞の靈廟を建ててその功績をたたえた。帰浄以後群萌の中で浄土の教えを説き、念仏の教えの中で命終つた曇鸞の晩年の行実が、美しく讃えられている。

しかしよく読めば、この曇鸞の行実は全て、天子との関係の中で讃えられている。「魏の天子」が誰であるかは、推測をすることができない。曇鸞の晩年、その活動した場所や年代から、既に先学の指適するように、東魏の孝静帝(五一四～五五〇)と考えられる。④私は、その孝静帝の手厚い保護と尊敬とを受けていた曇鸞にこそ、親鸞が注目したのではな

いかと思う。もちろん晩年の曇鸞の行実も大切ではあるけれども、その全体が「世俗の君主」の帰依を一身に受けた念仏者曇鸞に、親鸞は「超世」という意味を仰いだのではなからうか。仏道は言うまでもなく「生死いずべき道」である。その「生死いずべき道」に念仏する仏者として曇鸞は立ったのであるが、その「超世」の最も具体的な証しが、世俗の天子の帰依ではなからうか。具体的に明々白々とした超世の事実を生きていた曇鸞、その曇鸞をこそ親鸞は仰いでいたのだと思う。

さて、最後の三十四首目の和讃について考えてみたい。言うまでもなく、これまでの十首の曇鸞の伝記の讃詠の後、十一首目から三十三首目までの二十三首は、天親の『浄土論』を註釈した曇鸞の教学の功績を讃えたものである。十一首目の和讃に、

十一 天親菩薩のみことをも 鸞師とぎのべたまわずは  
他力広大威徳の 心行いかでかさとりまし

と讃えられていることから、よく分かる通りである。

私は、すでに何度か発表しているように、曇鸞の『浄土論註』は『浄土論』の一字一句の註釈ではあっても、その仏道観は、天親と違っている。インドの大乗仏教は、誰もが任運無功用に自利利他を行じる菩薩となることを大乗と

言う。要するに、大乗の仏道が、菩薩道として表わされるのである。しかし中国では、様々な理由から、大乗の仏道が菩薩道としては充分に展開しない。むしろ菩薩を菩薩たらしめている法の顕揚に重きが置かれ、大乗の仏道が、菩薩道としてよりも、法の真実を表わす一乗として根源化され展開する。要するに、誰もが平等に救われていく法の普遍性、真理性が、一乗として明らかにされるのである。したがって、インドの天親は、『大経』の願生浄土の仏道を、大乗の菩薩道として顕揚する。しかし、中国の曇鸞は、その同じ願生浄土の仏道を、煩惱具足の凡夫の誰もが救われていく、無上仏道として明らかにするのである。

すでに尋ねたように、自らを煩惱具足の凡夫と自覚し、群萌と共に生きた人が曇鸞であった。宿業の身としての責任をこの世で果していくことの全体が、浄土へ願生していくという意義を持つ仏道。それこそが、『大経』の開頭した願生道が、人類に捧げた独自性である。それを、曇鸞は『論註』で明らかにしたのである。くり返すようであるが、正直に凡夫として生きる人生の全体が、世を超えろという意義を持つような仏道。それを教学として明らかにしたので、『論註』である。その功績を讃えた最後に、改めてもう一度、生き様と教学とが一つになっていた曇鸞の全体を

菩薩と讃えて、三十四首目の和讃が置かれたのであると思われる。

三四 本師曇鸞大師をば 梁の天子蕭王は おわせしか  
たにつねにむき 鸞菩薩とぞ礼しける

最後に曇鸞の全体を讃えるこの行実だけは、『統高僧伝』に依るのではなく、迦才の『浄土論』の、次の文章に依っている。

洞らかに衆経に曉らかにして、独り人外に出たり。梁の天子蕭王は、恒に北に向て鸞菩薩と礼したてまつる。

この文は、八十四歳の親鸞が、『論註』の加点の終わった後に書きとどめて、『論註』を書いた曇鸞の功績を讃えた文章でもある。凡夫の自覚の徹底した曇鸞を、梁の武帝が大乗の菩薩と讃え、礼拝していたところ、親鸞は甚深無量の意義を想われたのではなからうか。二十九歳の時の、あの法然上人を眼の当りにした感動を、つまり、愚痴の法然房と名のって謙虚に生きていた法然上人の全体を菩薩と仰がずにいられなかったあの感動を、改めて、この文章で実感したのであろう。だから親鸞は、この文章に依って、曇鸞を龍樹・天親と並ぶ菩薩と仰ぎ、『論註』を『註論』として『論』と同格に尊敬するのである。したがって、

この和讃も超世の菩薩という意味から言えば、先に尋ねた六首目から十首目の讃詠と同じ意義を思う。さらにそれにつけ加えるとすれば、北朝の孝静帝と同時に南朝の梁の武帝を挙げて、中国全土の尊敬を受けたことを表わそうとするものであろうか。

## 二

さて、これまで尋ねたように、曇鸞の伝記を讃えた和讃のうち、三十四首目と『安楽集』からの三首を除いては、全て『統高僧伝』に依っていた。繁をいとわず、その典拠となっているとされる文章を当ってみたのである。それは、親鸞が『統高僧伝』を典拠として和讃を造られているが、その一部のみを取挙げて、曇鸞の伝記として、明らかに、明らかにしたかったためである。『統高僧伝』の曇鸞伝には、おおよそ次のようなことが伝えられている。

曇鸞は五台山の近くの雁文に生まれた。若くして五台山を訪れ、文殊菩薩の霊跡に感激し出家した。出家後は四論の学匠であった。その曇鸞は、『大集経』の註釈の途中で病に倒れた。あるとき秦陵の故墟で靈感を受け、病気はいえるが、生命に不安を感じてはその仕事も完成しないと、長生不死の仙方を求めて、江南の陶隱居を尋ねることを決



意した。

江南旅行の途中、梁の武帝と仏性の義について論議した。さらに曇鸞は、陶隱居への来意を告げると、武帝は、曇鸞に次のようなことを言うのである。私は彼を度々召すけれども、彼は一度もそれに応じたことはない、だからあなたの来意も果しがたいであろう、と。しかし、曇鸞が、陶隱居のいる茅山に着くと、彼は遠来の客を丁重に遇して『仙經』十巻を授け、その来意に報いたのである。

帰途、曇鸞が浙江に至り着くと、江の神の鮑郎子神が、江に波をたてた。江を渡れなくなった曇鸞は、鮑郎子神の廟所で、波を停止するよう祈った。そのお陰で不思議にも明朝浙江を渡った曇鸞は、その旨を武帝に申し述べ、武帝は、その奇瑞に感じて、江の神のために靈廟を建てた。

さらに帰路洛陽の都で、菩提流支三蔵に逢い、先の問答の末、『観無量寿經』を授けられた。そしてすでに尋ねたように、曇鸞は浄土教への美事な回心を果すのである。帰浄後曇鸞は、孝静帝の尊敬と保護のもとで浄土教の教化に身を挺し、親鸞が和讃に詠われていたような記事が、伝えられている。臨終にいたっては、幡花幢蓋、たかく院宇に映じ、ふくよかな香りが起こり、音声がかまびすしく聞こえ、誰もがこの奇瑞をひとしくながめることができた。こ

のことは皇帝にも上達され、天子はあつくこれを葬して、靈廟を建てたことが、伝えられている。

さらにその後の記述では、曇鸞の著作が挙げられて、その功績が讃えられている。そこには、仏教関係の著作だけではなく、『調氣論』といった医学の著作まで挙げられている。先学は、「曇鸞法師の名は、浄土教家としてきこえていたばかりでなく、調気方や薬餌の指導者としても、その名がおつていたとみうけられる」と、指摘されている。さらに『統高僧伝』では最後に、曇鸞は、自らを有魏の玄簡大士と号したことが伝えられている。以上が大体の『統高僧伝』の記述である。

これでよく分かるように、親鸞は、「曇鸞和讃」で彼の伝記をトータルに讃えているわけではない。その限り、単なる伝記の讃詠ともまた違うのである。私は、親鸞が和讃で讃えようとした行実は、三つであると思う。一つは、徹底した自力無功の自覚を契機とする回心の行実。二つには、自力無功の自覚の内実である凡夫の自覚。これはすでに述べたように、あえて『安樂集』に依ったものであり、しかも道綽の意図を無視して、親鸞が曇鸞の凡夫の自覚にだけスポットを当てたものであった。さらに三つには、すでに尋ねた通り、超世という意義を持った行実、の三点である

と思う。

「曇鸞和讃」では、この三点について讃えられているが、「正信偈」では、よく知られているように

本師曇鸞は、梁の天子、常に鸞のところに向こうて菩薩と礼したてまつる。

三蔵流支、浄教を授けしかば、仙教を焚焼して薬那に帰したまいき。

と詠われて、超世と回心の二点にまとめられている。さらに『尊号真像銘文』では、「正信偈」の超世を表わす部分の典拠となった迦才の『浄土論』の文章、即ち先に述べた『論註』の加点の後に親鸞が引文している文章であるが、それだけが挙げられ、その文章を親鸞は、詳しく註釈しているのである。

このように見えてくると、親鸞の意図がよく分かると思う。『大経』に説かれる願生浄土の仏道を、一言で語れば超世である。(『尊号真像銘文』)しかし、超世は全ての仏教の面目である。願生の仏道に限った事ではない。願生浄土の仏教の独自性をさらに挙げれば、超世と同時に自力無功の自覚を契機とする回心こそ、一般仏教に選ぶ、願生道の独自の面目なのである。さらに、超世と回心に加えるとすれば、回

心の自覚の内実である凡夫の自覚であると思う。(曇鸞和讃)

このように、「曇鸞和讃」で親鸞が讃えた曇鸞の行実は、実はそのままが『大経』の願生浄土の仏道を教える教えである。そこに、一般的な伝記の讃詠とはまったく違う、親鸞の恣意的とも思える、行実の取捨選択があるのである。

要するに、『大経』の仏道を教える行実以外は、いかに曇鸞の伝記といえども親鸞にとっては、さほど重要ではなかったのである。逆に、『統高僧伝』で、それを表わすに充分でない所は、『安楽集』に典拠するものであっても、親鸞にとっては必要であったのである。そのようにして親鸞は、曇鸞の伝記がそのまま願生の仏道を教える教説と仰いでいたのである。

しかも、それは難しい思想表現としてではなく、何の説明もいらぬ具体的な生き様の事実として、これ程美事に浄土の仏道を教える行実は、七祖と言えども、他の祖師にはない。そこに親鸞が、曇鸞の伝記のみを「高僧和讃」で讃えた理由があると思われる。

さてこのように尋ねてみると、親鸞が『論註』を書いた曇鸞を、どのような方として仰いでいたかがよく分かる。徹底した凡夫の自覚を生きた曇鸞を、親鸞が菩薩と仰いだ

のである。私は先に、インドの大乗と中国の大乗について一言した。中国の大乗は、法の普遍性を表わす一乗として展開したこと、を述べた。その際、最も問題になるのが、仏道にもれた「五逆謗法」の問題である。そのような「外道凡夫人」が救われることを、『論註』「八番問答」で、身をもって証明し、一乗を顕揚した方が、曇鸞である。親鸞が浄土の祖師として仰いだ曇鸞は、凡夫の仏道である無上仏道を開顕した曇鸞である。『論註』を学ぶ時の最も大切な指針として、われわれ後学の者の心すべきことであると思う。

さて、浄土の仏道を教える回心、凡夫、超世、この三点は、親鸞が二十九歳の時に法然と出遇ったあの体験の自覚的意義以外のなものでもない。親鸞は、念仏者として甦ったあの感動に立って、その意義を曇鸞の行実徹底して教えられ、自覚化していったのである。だから親鸞が出遇いの体験に立って浄土の仏道を顕揚すること、曇鸞の伝記を讃詠することとは、まったく別のことではない。ここでは尋ねることはできないが、他の祖師に対する讃詠も事情は同じ事であると思われる。

さらに今一つ思われることは、仏道は師との出遇いに極まる。親鸞と法然との出遇いに教えられる通りである。自

らの中に真実などどこにもないという徹底した懺悔は、師を大悲の菩薩と仰ぐことと別のことではない。そこにこそ、われわれの仏道の歩みが初めて始まるのである。その意味で言えば、あの曇鸞の伝記の讃詠は、師の法然を通して親鸞に見えてきた曇鸞像であると、私は確信する。

法然は四十三歳の時、「一心専念弥陀名号、行住坐臥、不同時節久近、念々不捨者、是名正定之業、順彼仏願故」というあの善導の文に遇って、「たちどころに余行を捨て、ここに念仏に帰しぬ」と回心を表明した。そして、自らを愚痴の法然房と名のって、群萌と共に生きた念仏する仏者であった。その法然を、親鸞は超世の菩薩と仰いだのである。曇鸞を超世の菩薩と仰いだことと、まったく事情は同じである。ただ、中国ではその超世が、文字通り世俗の君主の帰依という形をとったが、残念ながら日本では、流罪として逆に超世を証明したのだと思われる。法然が超世という意義を生きたからこそ、日本では朝廷が恐れて流罪とした。しかもその法難の中で、自らの生命をも念仏に捧げていった法然を、親鸞は「生死いずべき道」に立った超世の菩薩と仰いだのだと推察する。

以上、「曇鸞和讃」を中心に、思いつくままにいくつかの事を探ねた。それぞれの問題について、十分な攻究はな

されていないが、宗祖親鸞聖人が仰がれた曇鸞像に、『浄土論註』学をぶ視点を教えられたことだけは、確かである。

註

本文中の漢文は、読み易さを考慮して書き下し文とした。

① 野上俊静著『中国浄土三祖伝』四七頁参照

② 野上俊静著『観無量寿経私考』五九頁参照

③ 『同右』六〇頁参照

④ 野上俊静著『中国浄土三祖伝』四八頁参照

⑤ 『同右』五五頁参照

(本学助教授 真宗学)

(平成三年十月二日受付)